魔剣士
リネ
Leane of Evil Blade
許嫁と女騎士が寝取られる刻
空蝉
原作／まくらカバーソフト
挿絵／桐島サトシ
試し読み版
18
未満
二次元ドリームノベルズ

小説 空蝉
原作 まくらカバーソフト
挿絵 桐島サトシ
魔剣士
リネ
Leane of Evil Blade
許嫁と女騎士が寝取られる刻

登場人物紹介

Characters

メモリア

ライオネル王国の貴族のお嬢様で、エリアスの幼馴染兼許嫁。氷雪の魔法を扱う魔術師。領地をファルコンに攻められ、囚われてしまう。

リーネ

ライオネル王国の騎士の名家ストームランス家のお嬢様。亡き父の遺志を継ぎ騎士として聖剣を振るう。女性らしい穏やかな性格で年下のエリアスに対しお姉さん風を吹かせる。

ファルコン

元はエリアスの仲間だったが、仲間を売って帝国に寝返った粗野で卑劣な男。

エリアス

大陸支配を目論むレグナ帝国に対抗するライオネル王国の司令官。下級騎士の出身だったが、その能力を買われ、軍を率いることに。メモリアの幼馴染であり許嫁。

プロローグ　007
第一章　因縁のゲッコー砦　012
第二章　縄音を聞きながら　069
第三章　一番欲しいもの　136
第四章　魔が満ちる時　182
エピローグ　250

第一章　因縁のゲッコー砦

王国暦千二百二年。

突如として始まった戦争も、二度目の夏を迎えることとなった。

「長いようでいて、あっという間だったな……」

ライオネル王国軍の若き総司令、エリアス・レイランドは自国の南西端に位置するゲッコー砦に陣取り、味方の布陣を指揮しつつ、時の流れの速さを実感していた。

二年前、当時同盟国であったレグナ帝国の突如の侵攻により戦争は始まった。大陸西部を統べる軍事大国との戦力差は著しく、また同盟相手からの宣戦布告もなしの奇襲じみた侵略の前に、緑豊かなライオネルの王都アルヴァリアはわずか六日で陥落してしまった。王都陥落の折に名だたる騎士が戦死し、一度は国そのものが消滅することともなった。

それがレジスタンス活動を経て王城を奪還するに至り、国の再興と共に国軍も再編成されて、今や数多の反帝国組織を吸収し、義勇兵の参加も後を絶たぬという状況にある。

その大軍を、レジスタンス活動期からリーダーを務めていたという理由で、未だ若輩の身である自身が率いているのだ。平時であればあり得ぬ話だ。大抜擢を重荷に思っていない、といえば嘘になる。

だが同時に、仲間の期待と献身に応えたいとも、己と仲間の知力武勇を最大限活かすた

めの采配を振るえる立場にあることをありがたいとも思っていた。
仲間の一人で姉代わりを自任する女騎士に言わせれば、「そういうところがリーダーにふさわしい」となるのだろうが――。
（オレが謙遜すると決まって「そんなことないよ」って言い張るからなぁ）
『エリアス君。キミは、自分で思っている以上に多大な成果を残してるわ。フィオナ姫と並ぶ、皆の期待の星なんだから。もっと自信を持っていいと思うな』
そんな風に言われたこともあった。
すぐにお姉さん風を吹かす一方で、どこか天然なところもある栗毛セミロングヘアの女騎士。「武のストームランス」と謳われた前王国騎士団長ブレイズン・ストームランス卿を父に持ち、王城で戦死した彼の名誉と誇りを女だてらに背負っている彼女もまた、レジスタンス時代から苦境を共にした仲間の一人だ。常に先陣を担う、頼れる戦力でもある。
「……弱気になったら、また膨れっ面にさせちゃうからな」
年上の女騎士の膨れっ面は妙に愛らしく、また目にしたいという思いも少なからずある。当人にそう告げれば、頬はおろか耳まで羞恥に染めて狼狽えるに違いない。
伸びた前髪を掻き上げ、戦場の緊迫感に慣れてしまったことに皮肉めいた思いを抱えながらも、青年司令は肩の力が少し抜けたのを実感していた。
小国ではあるが長の安寧を享受していた祖国ライオネルが、同盟を結んでいたレグナ帝国に攻め滅ぼされたあの日を境に、何もかも変わってしまったのだ。

それ以前は新米にふさわしく辺境の山賊征伐を任されていたのが、今や軍司令。数十名の部下を率いていたのが、今では万単位で人命を預かる立場にある。
立場の変化だけではない。
「シャドータウン、か……」
ゲッコー砦の北西にある街の名を呟くと、嫌でも苦い感情がこみ上げてくる。
そこは、かつて王国再興前に初めて自分たち以外のレジスタンス組織と会合し、合流の約束を取りつけた街。そして、その際に仲間に加えた、同志と思っていた一人の男の裏切りにより、多くの仲間を亡くす大敗を喫することとなった地でもあった。
（もう二度と、あんな思いは御免だ。誰にも、させたくない）
そのためであれば重責を一身に背負う辛さなど、大したものではない。仲間を、国を、国の民を、すべてを護れるくらいに強く在りたいと、切に願う自分がいた。
ファルコン。共に戦ってきた仲間の首を手土産に今は帝国将軍の地位にある男の裏切りののちも、様々なことがあった。そのほぼすべてが艱難辛苦であったものの、今日まで屈せず戦い抜けてこられたのは、労苦が無駄でないと思える成果も上がっていたからだ。
「……王都を取り戻してから、もう一年か」
思わず口を突いて出たそれが何よりも大きな成果だ。
侵攻された当日に王城にいた者は、大半が命を落としており、特に王族はフィオナ姫を除いて処刑されてしまっている。大臣や官僚も、ほとんどは城と運命を共にしたが、生き

残ったわずかな者は敵国へと寝返ってしまった。

国を再興できたといっても、あまりにも人材が足りないのが実状なのだ。ゆえに、常に危うさを孕み続けてもいる。若輩の我が身が軍司令の立場に加えて、摂政として政治の中枢をも任されているのが、窮状をいやが上にも表していた。

だが、それでも唯一難を逃れたフィオナ姫が反帝国の旗印として凛と振る舞ってくれるおかげで、軍の士気は高く保たれている。レジスタンス組織出身者、志願兵。出自は異なれど、誰もが傍若無人な帝国の統治に抗いの意志を示し、平和を取り戻したいとの願いをライオネルの旗のもとに委ねてくれている。

民の想いも背に戦い続けた結果、今やライオネル王国は往時の国土の九割方を取り戻している。後は、大陸南東部の地を残すのみだ。

使命感に支えられたライオネル軍は高い士気を保持したまま勝利を重ねており、敵国レグナは新司令官の無策もあって敗退を連ねている。

すでに押さえてある大陸中央部に加えて、先日取り戻したばかりのゲッコー砦を拠点にシャドータウンを攻略すれば、南東部の占領地は帝国本土より分断されることとなる。より容易に奪還が成せるはずだ。ようやくあと一歩のところまで来た――そんな実感が、塔の窓から見下ろす懐かしい景色と共に胸に染む。

この地は騎士に叙任されて初めての任務でも訪れた。そして、砦の東には、大恩あるシモン伯爵の所領だったレーベン――やはり未奪還のままの、第二の故郷がある。

（開戦の少し前にシモン伯爵が亡くなってしまった後は、メモリアが領主を務めていた。……田舎だけれど、穏やかな気候に、優しい人柄の人々が住まう、大好きな街）

帝国に占領された地の領主は、殺害されるのが通例だ。未だ例外があったという話は聞かない。子供でも知っている事実である。

それでも、メモリアに贈った婚約指輪をこの目で見るまでは。愛しき恋人の死を信じられない。一縷の望みにすがり続けていたかった。

（護ると誓ったんだ。なのに、オレは……）

レーベンが帝国の手に落ちたと聞かされた当時は、再結成間もない国軍を動かすのに手一杯で、助けに駆けつけられなかった。祖国と民だけでなく愛しい人も護りたくて騎士になったというのに、失った国を取り戻すことに注力せねば即座に帝国に潰されかねない有様がそれを許さない。己の力足らずを、嫌というほど味わわされる毎日だった。

もしメモリアが生きていてくれたなら――いや、きっと生きている。

（見つけ、助け出して……今度こそ必ず護り抜いてみせる。彼女と再会したら、まずは「すぐに助けられなくてごめん」……そう、謝ろう。それから胸を張って報告できるように……その日まで勝利を重ねてみせる）

シャドータウンを落とせば、帝国本土へ南回りでも攻め入ることが可能となる。

開戦当初は静観を決めこんでいたタリミア公国が突如として参戦し、三つ巴の状況が生まれたのも、レグナ帝国の攻撃を一身に受け止める必要がなくなったという観点では、あ

りがたい事態だ。
ライオネルに傾いている戦の流れを変えぬためにも、勝ち続けなくてはならない。祖国と、そこに住まう民の安寧のために。
それだけにとどまらず。
「メモリア……」
いつにも増して勝ちたい理由を抱えた青年の心身は、昂っていた。
布陣を終えたとの報告がもたらされるまでの、わずかな間だけと心に決め。エリアスの眼差しは再び、砦から見通せるはずもない第二の故郷の方角を向いた。

「ランサー隊！　ここが踏ん張りどころよっ」
剣戟と、血と汗と土埃の匂いが跋扈する戦場に、馬上よりの発破がかけられる。青を基調とした鎧装束に身を包む女騎士、リーネ・ストームランスの澄みきった声音は混沌とした戦場にあってもよく通る。これまで必ず勝利をもたらしてきた女傑の鼓舞に応えるべく、旗下のランサー隊は馬脚を緩めることなく、地鳴りのごとき歓声を上げた。
「聖剣ラグナロクよ、我らに勝利を！」
栗毛をなびかせて愛馬を駆り、自ら先陣をきるリーネの右手に収まる両刃剣が、柄から刀身の先まで淡い光を帯びている。
それを目に留めた途端、すでに総崩れの様相を呈していた敵軍の統率は見るも無残。我

先にと背を向け逃げ出す者が続出する有様となった。
そうしたことには目もくれず、リーネ指揮下のランサー隊は敵陣中央に深々切りこんでゆく。聖剣と呼ばれる剣を振るうリーネは、常にライオネル軍で最大の戦功を挙げてきた。その勇猛かつ華麗な剣さばきをじかに見ていればこそ、配下のランサー隊の士気は高く、隊そのものが敵陣を断ち裂く一陣の刃と化すのだ。
「せやああっ！」
輝く聖剣が気合一閃、振り下ろされ――発生した衝撃波が、うなる大蛇がごとく大地を抉りながら猛進する。逃げ惑う者ではなく、陣の奥底で狼狽えるばかりの敵将を狙い打ちにした斬撃が、将を護らんとした勇猛なる敵兵を巻きこみながら直進し、そして、標的を貫き、爆ぜた。
「逃げる者は追わなくていいわ」
誇りも志もなくした者は、死したも同然。すでに斬るに値しない。
主君のため、戦場に命を懸けられる者だけが騎士たり得る。亡き父の教えを胸に、リーネは戦場を駆ける。自らの斬撃が舞い上げた粉塵をも裂くように、深く、愛馬と共に突き抜けた。
「仲間のために、戦場を均す……私たちの手柄よ！」
数日前に聖騎士の名を戴いたばかりの若き英雄の言葉に、旗下よりの野太い数多の雄叫びが呼応する。

先陣の勤めをこの上なく果たすにとどまらず、後続のために危険を極力取り除く努力を怠らない。それが毎度の、女隊長のやり方だ。頼もしくも愛おしい。ランサー隊の誰もがそう思っているからこそ、共に駆けることに喜びを覚えずにいられない。どの顔にも、戦場に不似合いな爽やかな微笑が浮かんでいるのは、そのためだ。

「皆、遅れずついてきて！」

鼓舞する女騎士の声音に、より嬉しさがこみ上げる。必要とされていることを喜び、期待に応えようと思うのだ。

仲間を思う気持ちと騎士としての誇りに支えられた任務への責任感と、それを正しく遂行するための剣の腕前、統率力。戦の流れを読む洞察力。すべてを兼ね備えている女騎士の率いる隊は、常に多大な功績を残してきた。

すでに先に対した隊だけでなく、敵陣全体が総崩れの様相を呈している。大勢は決していた。ゆえに今日もこのまま勝利に導けるものと——女騎士は若き軍司令の笑顔を、旗下の者は女騎士の花綻ぶような笑顔を、また見られるものと思っていた。

「アルピナ、ヘルガ、デュロス、各隊が魔物と交戦中！　状況は我らの優勢です！」

若き司令官のもとには絶えず戦況の報告がもたらされる。

今もまた斥候からの報告を受けたエリアスは、一切取り乱すことなく、傍らの老騎士に向けて語った。

「狙い通り、ですね」
「うむ。策はもちろんじゃが……相変わらず、戦場の流れを読む力が見事ですな」
感服したというように、老騎士フレデリックが口髭を揺らして破顔する。
帝国が主力と用いるのは、オーガやリザードマンといった下級の魔物だ、対魔物戦闘の訓練を積んだ僧兵を従えた白魔法使いアルピナの隊が敵陣と組み合う間に、ヘルガ、デュロス両名の率いる弓兵部隊が背後ないし側面に回りこんで挟撃を仕掛ける。弓兵の援護射撃に気を取られれば正面の対魔僧兵に押し潰され、正面の僧兵に注力すれば左右よりの矢の雨に構える間が失われる。
加えて、アルピナ隊だけは当初伏兵として潜めておき、あえて防御の弱い弓兵部隊二つを撒き餌とすることで魔物部隊を誘いこむ算段も、見事に嵌まった。
誰しもが思いつく案に違いなかったが、敵魔物兵が現れる場所と、策発動のタイミング、それぞれを地形や戦の状況から予測するのが肝要。情報収集力、そしてその情報をもとに発令する指揮官の戦術知識及び判断力が大きく関わる作戦だった。
そうした面倒事の対処を完璧に成したというのに浮かれもせず、すでに次の策に意識を切り替えている若き指揮官に、フィオナ姫の近衛も務める老騎士は賛辞を惜しまない。
フレデリックだけではない。参謀、衛士、等々。立場は様々なれど本陣に詰めている者すべてが、この若者の下でなら必ず祖国を在りし日の姿に戻せると、揺るがぬ信頼を寄せている。

四方より注ぐ信望の眼差しを受け止めるエリアス自身も、期待に応えるべく心血を注ぐ決意を新たにし、本日の勝利を半ば確信していた。

（戦場では何が起こるかわからない。でも、敵陣は八割方すでに壊滅し、後は）

「後はリーネ隊からの、敵将打ち取ったりとの吉報を待つのみですな！」

代弁してくれた参謀の一人に微笑みと頷きで応じてから、前を向く。そうして見据えた手元のオーブが、淡く発光を始めた瞬間。エリアスは期待を抱かずにはいられなかった。陣に集う皆も同様の気持ちで、視線を小さな掌大のオーブへと一極集中させてくる。

稀代の大魔術師ベトリヌスの手により造成された、一対で相互通信の用を成す宝珠。その片割れを有するのは、先陣を任されたリーネだ。本陣に集う者なら誰もが知っている。勝利を常にもたらし続けてきた女聖騎士への信頼もまた、若き司令官に負けず劣らず絶大だった。だからこそ誰も、勝利の報であることを疑わなかったのだ。

なのに――宝玉に映し出されたのはリーネの笑顔ではなく、地べた。おまけに冬でもないのに真っ白に積雪している。誰もが異変に気づかされた。陣容に奔るどよめきの中いくら待っても、リーネの声が聞こえてくることはない。

――彼女が通信のスイッチを入れたのではないのか？

――ほぼ大勢が決していたはずの戦場で何が起こっているのだ。

不安を覚えぬわけにはいかなかった。

「リーネ⁉　何があった、応答しろっ」

手元のオーブを掴み取り、顔を近づけて懸命に呼びかける。司令官の緊迫した様子に陣の者たちの不安は一層高まったが、今はそれを気にする場合ではないと直感した、エリアスは重ねて何度もオーブの向こうにいるだろう姉代わりの騎士に呼びかけた。

その決死の想いが通じたかのように、ついに向こう側から声が届けられる。

「……リーネ……隊……全滅……撤退……お願い……」

それはまぎれもなく聖騎士リーネの声で。途切れ途切れではあったが、逼迫した響きから吉報ではなく、警鐘であるのが明白。最悪の、予想だにしていなかった知らせに、陣容の混乱は最高潮に達した。

「リーネっ……報告を、頼むッ……！」

耳を疑うような報告を受けて、この日初めて、そして久方ぶりの、誰の目にも明らかなほどの動揺が、エリアスの顔に浮かぶ。

彼に信望の視線を寄せていた各々の間に不安が蔓延し、恐怖に造成されるまで、さほどの時間も要さなかった。

その恐怖を煽る最悪のタイミングで、再度、オーブ越しにリーネの声が届く。

「魔術師が……氷雪の術を使う女……撤退して、エリアス君……ああっ！」

切迫極まりない悲鳴を最後に、リーネの声は途絶え、間もなくしてオーブの通信が打ち切られた。

女聖騎士の身に迫っていた脅威が、通信に気づき、オーブを破壊するなりしたのか。

最初は、わたしを嬲って楽しんでいるのだと思った。ただ、己の快楽のみを優先しているのだと。

『腹に力入れてっと、余計に痛むぜ。オレに全部任せとけ』

けれど、そう告げた彼の瞳は、わたしの表情を見据え、状態をつぶさに観察していた。

『まぁこっちも……気を抜くとすぐに出ちまいそうだけどな。へへ、お前の膣内が、そんだけ凄ぇってことだよ』

下品な褒めそやしは、何の慰めにもなっていない。

なのに、再びドレスの裂け目から乳房に摺り寄りへばりついた彼の手指に圧をかけられた途端。たわんだ乳肉の内に甘露が再来する。男の圧力に応じて強弱の変わる甘い疼きに、意識が否応なく引き寄せられていった。

『は、ァッ……うぅ、やぁぁ……胸はもうっ、やっ、ぁふっ、ああ、はひィぃ……ッ！』

乳首を舐り転がされ、疼きが痛切な痺れへと進化する。ああ、わたしの胸はこんなにも感じやすかったんだ――自分で舐めたことなど当然なく、知る由もなかった事実を改めて意識させられる。

『おらっ』

男の短い雄叫びと共に、つるりと丸い亀頭が金槌のごとく、膣の最奥を打ち叩く。

『んんぅぅ！』

鋭くも重たい痛みが、脳髄と腰の芯に届き、貫き通してしまった。割り裂かれた膣内全

体が、痛苦に戦慄いている。その震えが余計に、差し挟められる肉の狂気を悦ばせてもいる。隙間なくみっちりと膣を埋めるそれの脈動が強まっていくのが、手に取るようにわかってしまった。

それだけではない。

『ひぃあッッ⁉　やっ、そこっ、だめっ……だめぇッッ！』

わたしの割れ目の上端で密やかに疼き続けていた豆突起。剥けたての充血したクリトリスを、男が指腹で押さえ、優しくくすぐった。

感度の高すぎることを見越しての柔い刺激は、処女膣に痛みを相殺して余りある悦の痺れをもたらし。

『ふぁッッ、アァァ……ッ！』

ひと際きつく膣が収縮した。当然、突き入っているファルコンのペニスは締めつけられ、また嬉々とした脈動を打ち連ねる。それにより震わされた膣内の襞肉にはクリトリス愛撫を受けて染み出たばかりの蜜が絡みついていて。痛みは、互いの性器が脈を伝えるたびに、緩和されていった。

『オレの手で、チンポで、女の悦びを知りやがれ……！』

語気を強めた囁きと、それに合わせて吹きつけられた吐息の熱が、耳朶を灼く。

ゆっくりと膣内から抜け出てきた逸物の幹に、べっとり。相当に薄まった破瓜血と蜜汁が絡みついている。それを指で掬うや、当たり前のようにファルコンは勃起クリトリスへ

と摺りこんだ。
『んひぁッッ、ひ……ッッ！　はひッ、ン！　ンンあッ、アァァ……〜〜〜ッッ！』
己の蜜を潤滑油とされ、より回転速度の上がった摩擦を浴びたクリトリスが、孕まされた熱と痺れを糧に膨張する。すでに包皮はずる剥け、完全露出した状態で、ヒクヒクと歓喜の震えを発し。触れあう指に嬉々とすがるそれを、男が心底嬉しげに眺めていた。
クリトリスが膨らむほどに、男女の結合部より染み出る蜜の量も増してゆき。その蜜を内に押し戻すように、逸物が突き刺さる。ファルコンの腰の抜き差しも、蜜量が増すにつれてスムーズに、回を重ねるたびに少しずつ速度、圧力を上げていった。
膣の外と内、両面より押し寄せた快波が、ちょうど中間——この時はまだわたし自身所在を認知していなかった、へその裏側付近にある性感帯にぶつかって、増幅する。
『はゥッッ、ンッ!!　〜〜〜ッッ！』
何これ、こんなの受け止め続けたら死んじゃう——無知の過ぎたわたしはそう、思いこんでしまった。止めどなく溢れる涙のせいか、すがりたくて思い浮かべた愛しい婚約者の姿が、まるで霧のように霞んでいた。そのタイミングを知っていたかのようにファルコンが追い立てる言葉を口にする。
『一突きするたびに子宮が降りてってるの、わかんだろっ!?　女の身体はそういう風にできてんだ、だからよ！』
認めちまえ——最後だけ耳元での囁きに転じた男の言葉が、弱りきっていた心根にまで

浸透する。

ビグビグと、膣内で肉の幹が震え始めていた。その予兆が何を意味するのか。知らぬがゆえに恐怖が膨らみ――示された逃げ道を選び取る他、なかったのよ――。

揺さぶられた端から扱き擦られる膣襞が、また性懲りもなく蜜を漏らして、男のピストンを手助けする。それを、返答と受け取ったファルコンの手指が、左乳首とクリトリスを同時に、舐るように擦り転がした。右乳首にかぶりつくなりチュウチュウと吸い立てる口腔内で、ぬらり躍った舌がさらに乳首に巻きつき、舐り扱いた。

『気持ちいいだろ？　素直に言えば痛いことはしねぇよっ。認めちまって楽になれっ』

『はひっ、いぃッ……ンッああっ、いっ……イイッ、ですッ、気持ちイッひあぁっ、あァあァッ、な、に……？　何か、あぁ、きちゃうっ、きちゃぁ、ぅううっ！』

三点、突き上げられ続ける膣奥も合わせると四点か。同時に発生した苛烈な痺れが、体内でぶつかり、すり潰し合う。悦の欠片を弾け散らせながら、より大きな塊へと融合を果たしていく。

膣の底目掛け突き進む悦の塊とは逆向きに、何か得体のしれないものが引きずり出されていくような感覚に囚われて、それをそのまま素直に伝えた瞬間。確かに心の重荷から解き放たれた気がして、切々と響いていた衝撃に、より甘美な感激を覚えてしまった。

『来るじゃねぇ、イクだ！』

吠えるなり、ひと際膨れたペニスの切っ先が膣壁へ――先ほど知れたばかりの性感帯へ

と押しつけられる。降りていたところを突き上げられ、痺れたのも束の間。互いのヌルつきを利用して摺り捏ねられた子宮の口が、あまりにあっけなく陥落。開いたばかりの口に、食いつかん勢いで逸物の頭が摺りついた。

昂奮の火照りにまみれたファルコンの身体から滴る汗が冷たく感じるほどに、火照り狂わされたわたしの身体の中でも、特に感度の高い部位が、なお攻めこまれる。

脇を締めて中央に寄せ上げることを強いられた両乳首はまとめて彼の口に含まれ、舐り転がされ。勃起したクリトリスを執拗に指腹で捏ね繰られ。反った拍子に浮き上がった背から尻の谷間までを摺り愛でられ。身の内にでまた快楽の波がぶつかり弾けたタイミングで、子宮の口を捏ねていた亀頭がぶぐりと膨れた。

『イクぞっ！』

『ふぁッ、あぁッ、ひッ、いいっ、あぅっ、うっ、うァァァ！』

明瞭な言葉を発せられぬほどに追いこまれるさなか。甘美の痺れに溺れる膣肉を引き締めながら、猛々しさを増す一方の牡の脈動を感じ続けていた。二度、三度――突き上げられるたびに子宮の口がとろみ汁を漏らし、滑り外れぬようにと亀頭を吸引する。そうしてまた雄々しさを教えこまれた女体が嬉々と蠢き、目一杯に逸物を締め上げた。

突き上げられるたびに堆積する恍惚を訴えるように、両手両足を男の身体にしがみつかせてしまう。

直後に、十六度目の突き刺しを数えたファルコンの腰が震え――。

『んひぃぃぃぃっ、イクッ、イク、イクッ、イクうううう〜〜〜ッッ!!』
どろりと粘っこい種汁が大量に雪崩こんできた途端に、脳裏も、瞼裏も真っ白に染め抜かれる。上の口が独りでに、教えられたばかりの言葉を連ね叫んでいた。
膣壁のへそ側中腹にある性感帯へとぶちまけられている白濁汁に、迫り上がってきた得体のしれない何かが合流して、ひと際熾烈な悦の痺れを生み落とす。膣内を下っていた悦塊が底にたどり着くのと、生まれたての痺れが爆ぜるのとが、同時だった。
『くぅおおおっ、締まる、締まるぜぇっ』
引き攣れた膣の締めつけを受けて、深々突き入ったままのペニスがなお震えを刻み。その都度噴き出た白濁の飛沫が、膣壁を塗り染め、悦の高波を再来させた。
『ひぁうっ、うぅ！　ンひぃぃッッ、また、ァッ、またイクぅぅぅぅっ』
女の絶頂により絞り上げられた男根がまた果て、射精により炙られた膣洞も再度イキ果てる。絶頂に伴う膣の収縮と蠕動(ぜんどう)によってまた男が――終わりの見えない悦楽の輪廻に引きずりこまれるがまま。わたしは喉が枯れるまで、艶声を吐き出し続けるしかなかった。
いつの間にかイヤらしい汁をべっとりと被ってしまっている婚約指輪に目が留まったけれど、もう涙も枯れてしまっていて、一滴もこぼれ落ちてくれなかったわ。
その一夜で、五度の膣内射精を受け、七度わたしは絶頂の味を知ったのよ――。
「回を重ねるたびに、身体が馴染んでいく……。女の身体はそういうもの、という彼の言

葉を否応なく実感したわ」

「……やめて」

語り続けるメモリアに制止を促す、リーネの声が牢に響く。もうこれ以上聞きたくない。心の悲鳴を体現したように、その声は震えていた。

「明け方。ようやく解放されたわたしが、ベッドでいびきを掻くこの人の寝顔を見た時。体中の水分を費やす勢いでさめざめと泣いたけれど……その時もまだここ、擦られすぎて疼き通しのマンコに、おチンポの感触が残っていてね」

制止の声が聞こえていなかったはずはないのに素知らぬ顔で、己の秘部を指差しながら、なおもメモリアは告白を続けようとする。その左手の、どの指にもエリアスから贈られた婚約指輪は嵌められていなかった。

「……ッッ、もうやめてっ！　メモリアさん！」

牢の格子に手をかけて、叫ぶ。それでようやく彼女の口が止まった。

「私は……ライオネルを護る。何があろうとその想いを貫くわ。希望を捨てはしない」

それがエリアスにもらった言葉と、意志だから。

格子越しに立つ、いずれもエリアスと縁のあった男女二人を真っ直ぐ見つめ、訴えかける。

ファルコンはエリアスと反りが合わず、事あるごとに反発していた。案の定訴えは届かず、ニヤニヤと笑うばかり。メモリアの乳房を手中に収めながら、女騎士の胸当てを透か

すように凝視するこの男には何を言っても無駄だと、すぐに諦めがついた。
だが、エリアスと幼少期から共に過ごした婚約者の彼女なら――期待の目はいやが上にも、氷雪の魔術師となったメモリアへと向かう。
「……なら、こちらからも一つ、いいえ二つ教えてあげるわ」
捕虜の身の女の視線を受け止めずに俯いたメモリアの、再び開いた口からは冷たい返答がもたらされた。
「まず、一つ。あたしは、もう何もできなかった小娘じゃない。魔術師の才を見込まれ、帝国魔術師ベイワロスに師事し、すでに師を超える力を身につけた」
より蓮っ葉な物言いで自画自賛し。
「あたしの氷雪魔法は、一度に数百の騎士を殺せるわ。加減しなければあなたも部下と一緒に凍死体になってたってこと。……忘れないで」
視線をやり過ごして顔を上げるなり、背筋が凍るほどの殺気を放ち睨みつけてきた。氷雪の魔術師の二つ名にふさわしい酷薄を孕んだ美貌が、「今すぐ殺してみせましょうか？」と言わんばかりに薄笑みを浮かべている。
事の次第を面白げに見ていたファルコンの首が悠然と横に振れたのを見て、口惜しげに唇を噛んだのも束の間。メモリアの表情は、ほどなく一変。眉尻を下げ、瞳を細め、震える口から甘い響きを漏らしだす。
話の中では「薄い色合い」と自ら評していたメモリアの乳輪と乳首。弄られすぎたため

か今は随分と黒ずんでしまっているそれが、巧みに捏ね扱かれ、見る見るうちに隆起する。
「ン、ふぁ……ぁんっ……も、もっとぉ」
媚たっぷりの声を聞かせる愛妾を抱き締めながら、帝国将軍、帝国軍総司令の肩書を持つ男が言う。
「女ってのは、こういうもんだ。じきにお前にもわからせてやる」
語り終えたファルコンの眼差しは、獲物を狙う猛禽のごとく鋭く研ぎ澄まされていた。
「女である前に、私は騎士。だから、あなたたちの思い通りにはならないわ……！」
真っ向から受け止め、跳ね返したリーネの気丈な面構えに、ファルコンは楽しげに、メモリアは忌まわしげな顔で応じた。
「ククッ、どこまでもつかな」
「……女は女よ。それ以外にはなれっこない。これが、あなたが知らなければいけない、もう一つの事実」
勝利を疑わぬ野卑たる眼光と、自嘲のこもった視線をそれぞれ残し、男女が牢より立ち去る。二人の姿と気配が完全に消えたのちも、リーネは前を見据え、考え続けていた。
今の自分にできることは何か。すぐには出ぬ答えを前に足掻くほど、連中の前では隠しおおせた焦りが吹き出てくる。
青い戦装束に住まうウィスプの悲鳴が刻々と、装着している身に伝わっていたから。
（あとどのくらいの時間が、私にはあるの……？）

「このまま民に見られながら、中出しされたい。そう受け取って構わねぇな」
小刻みなピストンで膣の浅い位置を扱き続ける彼の言葉に、思案することもなく、尻を振って乞いねだる。
「ククッ、ならお待ちかねの……褒美をやるよッ！」
――ずぶぢゅううっ！
「ひあっ!!　あはあああああぁぁぁぁッ……!!」
内も外も蜜でドロドロの女陰が、勢いよく突き上げた長大な逸物を根元まで一息に呑んでいった。膣奥へと舞い戻ってきてくれたロングサイズの幹を、膣洞全体で、揉むように締め上げる。
突きこみを受けた女体がずり上がり、必然的に乳房が[redacted]ペニスを研磨した。
「んあっ！　あっあァ～～～ッ！」
びゅくっ、びゅぷびゅっ！
少年の泣き顔がさらにクシャッと歪み、乳で組み敷く腰がガクガクと痙攣する。乳の谷間に噴き出した白濁の飛沫の粘り気と熱量も、肌でじかに感知した。
だが、「イッたんだ」と理解しただけで、何の感慨も生まれなかった。
（だって、今はもっと大きなおチンポを一番気持ちイイ穴で頬張ってるんだもの）
女体の内に奔る期待と恍惚の混濁した衝動が、幾度目とも知れぬ絶頂を呼び寄せる。それをもたらしてくれたのは、乳の谷間で射精している[redacted]ペニスではない。すでに隅々ま

でぴったりフィットする形状に仕上がっている膣洞を、なお穿ち抉る、貪欲なる肉棒。

（[redacted]おちんちんと同じサイズのエリアス君とじゃ……絶対にこんな気持ちにはなれない……！）

この期に及んで、想い人と、暴虐の限りを尽くす男の性器を比較してしまう浅ましさ。そして、太くて逞しい牡を選び取ってしまう卑しさに、自己嫌悪する。その嫌悪すら、じきに肉欲の糧となり、火照り疼く胎の底へと染みていった。

「ふゥゥッ……このケツは誰のもんだ！　見てる連中に言ってやれッ！」

所有欲丸出しの、この男の逸物だけが、今や卑しく作り替えられた女体を満たしてくれる。もはや、そのことを否定することはできない。

――バチィィッッ！

「くひぃぃぃんんっ♥」

ズコズコと膣穴を突き上げられながら、尻たぶを平手で打ち据えられる。尻肉の深層にまでジンと響いた痛みが、股の奥より迸る恍惚と合流し、より痛切な快感へと成育した。再来した悦の高波に乗って、唾液にぬめる舌が思いのままを紡いだ。

「ファルコンッ、のぉっ……。お尻もお股も全部っ、ファルコンじゃなきゃっ、もう満足できないからぁっ、あなたのものにっ、してェェェッッ！」

従属宣言を受けて、衆目の色がまた変わったのが、肌で感じられる。

羨望を心地よく噛み締めながら腰の回転を速めるファルコンに負けじと、喜色にまみれ

た牝尻が弾み躍る。蠢動する蜜壺が唯一無二の逸物を頬張っては啜り、また深く頬張り。
「今夜もベッドで五発はヤルよなぁっ⁉」
——バチィッ！　ぢゅぶぅ！　バチィンッ！　ぼぢゅぶぅっ！
「はひいいいいいッッ♥」
苛烈なピストンを浴びせられる子宮の口が全開となって、肉厚の亀頭にむしゃぶりつく。そうして膣の口と同様に欲の深い啜り上げを披露し、種汁の射出を乞いねだる。ピストンと交互に訪れる平手の衝撃も、もはや最初から喜悦の痺れと化して膣洞へと響いた。
「ひぁっあああっやめてっもぉやめてよぉっ、僕のオチンチンッ、壊れちゃうぅぅ！」
射精中の敏感な幹を延々と乳房に掃き愛でられ、圧を強められるたびぶり返す絶頂の悦波に溺れている少年の涙声が、淫乱女の嗜虐心に火を注ぎ。情けのない勢いで断続的に乳谷に迸る白濁汁の粘り気が、それの幾倍もの濃厚さを誇る種汁が膣内に注がれる瞬間の至福を脳裏に呼び起こす。
今まさに高々と膣内で打ち鳴らされている牡肉の鼓動——射精へのカウントダウンを、愛しさに憑かれた膣襞が舐り上げ、締めつけた。
「ひぐっうンンンッ！　はひっ、あひゃあっ、ひっ♥　てっ、きてっ、ぇぇぇぇぇっ♥」
——ばちゅぶぢゅううっ！
供物のごとく男の眼下に収まった牝尻が、再び根元まで一気に逸物を呑みこんで媚びくねったのと。最大限に膨張しきった肉の幹が、すがる膣襞を摺り上げながら子宮の口を突

き破ったのとが、同時だった。
摺り愛で合った男女の性器が、共有した震えに呑まれた直後。
――ドグンッ！
雁首のところから、ぶぐぅっと膨れた逸物の切っ先が、子宮内に食い入った状態で白熱の塊をぶちまけた。
「ひィッッ！　っンぐうううぅぅぅう――――――ッッ♥」
女芯が、勢いよくぶち当たる射精の熱に溶かされて――忘我の中で、肉体全体へとかつてない悦の衝撃が波及していくのを感知する。
「ひっ、ふあああっ、はひぃっ、あ――――――っ♥」
痙攣が伝導した乳房の谷間でも再度、情けのない吐精が始まっていて、少年が少女のごとき嬌声を吐きつけてきてもいた。――が、そんなもの、膣で味わうそれと比べたら塵芥に等しい。気にかけようという意識すら芽生えなかった。
同様に、闘技場内に轟く大歓声も、まったく気にならない。
「ぐくぅっ、うぅおおおおっ！　孕めっ！　リーネェェェッッ!!」
――ぶぢゅッッびゅぐぶっ！　びゅぐびゅぐびゅぐぶびゅうううっ！
ただ、膣内に轟き渡った逸物の咆哮を抱き締めながら。直接雪崩れこんできた白濁の子種汁が見る間に子宮内部を満たしてゆく。それに付随する、牝としての本能的な悦びに攫われる。

「ンぁ……っ、ひぃぃ♥　ひぐっ、うぅ、ひぐのぉっ、とまらにゃ、あひィィィィッ♥」
征服欲を満たした逸物の脈動が、より強まってゆく。それに合わせて膣洞と子宮口が引き攣れて、牡の幹を絞り上げては、また新たな種汁を啜り飲む。
すぐに子宮内に収まらなくなった種汁が逆流、牡幹を伝って流れ出し、膣の襞の蠕動に従って、膣洞全体に運ばれていった。
「クハハ……ッ、こいつは素直に言えた褒美だっ」
――バチィッ！　ずぷぅっ！
最後の一滴まで注ぐつもりで腰を押しつけているファルコンの左手が牝尻をぶち、断いた尻が持ち上がった瞬間を狙って、さらに彼の右手指が、茶褐色の窄まりに突き入った。
「ひぎぅっ！　おおおひぃぃっ⁉　ひぎっ、ううひぎゅうううううッッ♥」
ぶたれた尻たぶに迸る愉悦、深く穿たれてなおヒクつき通しの肛穴の壁を、ホジホジされてより膨らむ、甘痒くも心地の良い衝動。すべてが種付けられて悦ぶ股穴へと集結し、ひと際の喜悦に溺れた膣の口が、小便のごとき勢いで蜜を噴く。噴き出た蜜は板床へと勢いよくぶち当たり、跳ね返った飛沫が、絶頂に引き攣る男女の下肢を濡らした。
――びゅぢゅっ！　っびびゅるぶぢゅっ！　ドグッ、どぐどぶびゅ……ッッ！
「ぐッ……おぉぉッ、っふ、ははッ、ふはははははっ、まだまだ出してやるぜぇぇっ！」
尋常ならざる量の精液を注ぎ続ける男の咆哮が、この時ばかりは福音のように感じられ――常時絶頂状態となった牝腰が、餓鬼顔負けの欲深さでまた新たな種汁を啜る。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌！

【偶数月】
隔月発売
2・4・6・8・10・12月

二次元ドリームマガジン
2D DREAM MAGAZINE

妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌！

【奇数月】
隔月発売
1・3・5・7・9・11月

コミックアンリアル
COMIC UNREAL

正義感に燃える少女達をたっぷり陵辱！
ヒロインのピンチ満載!!

【電子版】
毎月配信
書籍版は奇数月発売！

正義のヒロイン姦獄ファイル

あなたのキモチイイをお手伝い！キルタイムのアダルトコミック誌

電子書籍版も好評発売中

全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中！

KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ キルタイムコミュニケーション 検索

二次元ドリームノベルズ
シャイニングハーツ
日常に密着したエロス、リアルな舞台設定で送る官能小説レーベル！
とろ蜜美女めぐりの桃色バスツアー
リアルドリーム文庫
フリーダム120%!?ジャンルにとらわれないドキドキ★ラブ
戦うヒロインを屈服させちゃうかなり過激な陵辱系ライトノベル！
あとみっく文庫
呪詛喰らい師
キルタイムコミュニケーションノベルシリーズ
あなたはどのタイプ？
二次元ぷち文庫
ハルキ
あの人気作品の外伝作品もあり！
俺子書籍でしか読めないエッチノベル！
姫騎士クラスメート！
ビギニングノベルズ
「小説家になろう」の男性向けサイト「アクターンノベルズ」から書籍化！
異世界でチキる妹
ドキドキラブラブなハーレム系ライトノベル！
二次元ドリーム文庫
KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208
▶最新情報は公式サイトへ！ キルタイムコミュニケーション 検索